

伏見城関連 山科（大塚・小山）の石切場

中川亀造・池部龍夫・久保孝・武内良一

はじめに

前回 10 月の魅力探訪前になります。平成 27 年 4 月には「京都市遺跡地図台帳」に登録もされて、山科での遺跡として周知され、コースへの参加者の希望が多かったと聞いておりますが、今回は石切場でも小山、音羽川地域への案内となっております。あらたな刻印もわずかですが現れ、従前の刻印とは別種となり、発見された場所は石切場からとは離れて、運び出されようとした石に興味をよびます。

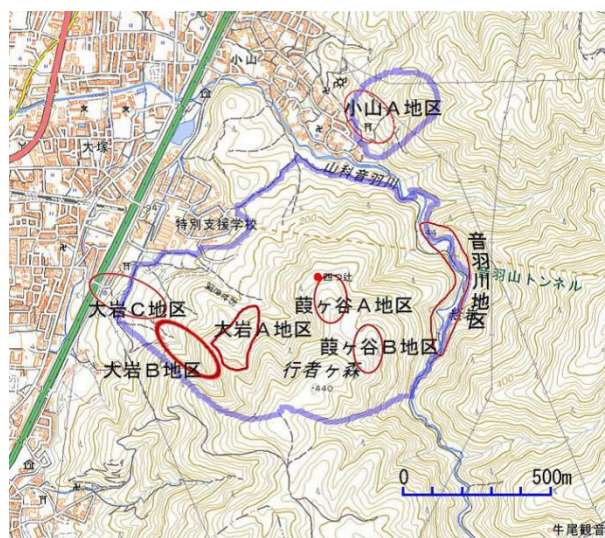
1、大塚 天神社境内に「帰って来た石の由来」

中川さんの報告から始まった刻印、矢穴痕のある石によって、慶長期（1600 年頃～ 葎ヶ谷 A 地区）に遡る石垣石の伐り出しは想定されました。それは伏見城でも徳川期、関ヶ原の戦い以後の木幡山に移された伏見城かと思えます。

昨年の 6 月から 8 月にかけて三か月間、幻の伏見城と云われる秀吉の指月城跡の調査があり、終了後の現地説明会は盛況で、たくさんの方が列をなして参加、順番待ちの状態は「飛鳥」である現説を彷彿とさせました。発掘報告書は一年を経過して発表される予定のようですが、資料としては当日の説明会で配布されたものと、「2015 伏見指月丘発掘調査成果、概要 2016.04.22」があるようです。

この調査が始まる以前から久保と武内の二人は、現地をうろろしてその発掘風景、現場の北側に石が集められているのをフェンス越しに眺めていました。後に現説でその石は、開けていくとき既に上部石垣列からこぼれていたのを集めていたと報告を受けました。現れた石垣は三段ぐらいで落ちこぼれていた石垣石を合わせ、五段ぐらいの石積みであったようです。発掘担当者（有 京都平安文化財）である小森俊寛さんやト田健司さんとは、伏見城研究会を通じて知己を得て、我々は大塚、小山で刻印石や矢穴痕のある石を調査している旨を述べ、さらに集められている石を「山科の石」がどうか調査させて下さいとし、快諾を得たのでその場で、三割方は「山科石」ではないかと即答しました。

続けて発掘調査をされている石垣の方も調査の邪魔をしない条件で許可を得たので、メンバーである永井さんに相談すると、翌日には大塚の刻印拓本作業にも来られた馬場さんが、二時間ほどで石垣石を 11 枚のスケッチ図に



纏められたので、図に番号を振り、表にして提出した次第ですが、結果はやはり三割方で「山科石」が認められます。そういう経過もあって現説も終わり、現場事務所をたたむ段階で、施主である大京マンションの方や、建設に関わる藤井組さんに、おそろおそろ石を一つ下さいと頼みました。すかさず小森俊寛さんが一つとは云わず、三つぐらいお願いしろと声をかけて戴きましたので、そのお声がかかりがって OK が取れました。

2、秀吉期に相当するのか

上記の経過を持ちまして、直ぐに山本石材の専務さんが桃山からの石垣石を運ぶ段取り、天神社へ持ち込み、大塚の平井さんや小林さんの協力を得て実現しました。当然、京都市文化財保護課、馬瀬氏などの承認もありますが、天神社境内に「帰って来た石の由来」なる説明板が、おこしやす“やましな”協議会と、京都醍醐ライオンズクラブさんの援助を持ちまして設置の運びになりました。有難うございました。



ところで説明板横の石組は、平井さんの甥御さんで庭園業をやっておられる方の、それも元々天神社境内にある矢穴の或る石を使って組まれ、その上に載っている三個の石が帰って来た石で、矢穴痕は何れもありません。慶長以前に使われている石垣石で矢穴痕を残すのは稀の様（全国の多くの例は知りませんが）で、自ずと平面を見せた丸みを帯びた自然石で組まれ、割石や切石は少ないようで、指月城跡の発掘では一石に矢穴列痕三ヶ所がある一石は確認しましたが。したがって高く積み上げる事が出来ず、折り返しが数段あったようだと聞いており、秀吉期の大阪城跡にもそれが残っています。

秀吉期と書く指月城ですが、文禄三（1594）年隠居屋敷とされた伏見指月の丘にある第（てい＝屋敷）を、急遽、明使を迎える講和会場にしようとして改造を行います。まだ正式な報告書を視ない段階ですが、概要として報告されているのには、金箔瓦の無紋瓦と表現されてもいますが、発掘担当者は「日章紋瓦」として、指月城跡近辺で 30 数個（欠片も含む）を発掘し、指月城跡をより西に確かめておられます。

石垣石ですが、持ちかえった石を奥田 尚氏（古墳石棺石材の産地特定や、「考古石材の研究会」を主宰されている）さんが、京都橘大学の要請を請けて山科の現場へ来られ（2 回目）、我々も同行して説明も承けま

「帰って来た石」の由来

大塚、天神社境内に掘えられた三石は、2015 年に発掘調査された伏見・指月城跡とされる石垣より移設したものです。

伏見・指月城とは、戦国の世から統一に向かう画期の、豊臣秀吉が天正 20(1592)年に居城を発展させ、明使(講和会議)を迎える為に鋭意築城されたが、歴史的記憶にも残る文禄 5 (1596)年の慶長地震によって倒壊しました。

関ヶ原の戦いの後、徳川家康も伏見に城を築きますが、何れの時にも山科の石は使われているようです。発掘調査地の所有者(株)大京をはじめ発掘を担当された(有)京都平安文化財さんや、文化財保護課の協力によってここに設置できるのは、

この大塚、天神社の背後(東)である「行者ヶ森」山一帯が、山科(大塚・小山)石切場の中心地で、昭和 52 年の刻印石(「角立ち四つ目結」)発見以来、三十数年を経て平成 23 年に刻印「一に〇」が再発見され、現在 20 以上の刻印がみつかり、200 個以上の石に矢穴や矢穴列痕が刻まれ、一例を除いて全てが石英斑岩となります。

平成 27 年 4 月、京都市の遺跡台帳に「641 大塚・小山石切丁場跡」として登録され、この山の石垣石が全国からも注視されています。発掘関係者各位のご協力を得て、「山科の石」がふるさとへ帰ってくる事が出来ました。

中川・久保・永井・武内 記
2015 年 12 月吉日



境内には、矢穴の開いた兄弟石が元々あり、これらを下組にして、移築復元しました。この復元にあたりまして地元の方の御協力がありました。

大塚天神社保存会・共有山護持会
おこしやす"やましな"協議会・京都醍醐ライオンズクラブ

したが、『古代学研究 209号(2016.6.24刊)』に「行者ヶ森付近の石切場跡の石材と石種」として載ります。文中の3、指月城出土石材との比較の項目で載るのが、「天神社の境内に豊臣秀吉が築城した初期の伏見城とされる指月城から出土した石垣材が展示されている。石材は自然岩で、石種が石英斑岩、形状が山地に転在する石あるいは露岩から節理面を利用して剥がしたような石である。…天神社に展示されている石は当神社東方の山地で採石された石と推定される。」と述べられている。詳しくは同氏より『古代学研究 209号』の抜刷りが送られてきましたので、山科図書館に一部を寄贈していますので参考にしてください。

3、「三雲家文書」資料の見つめ直しによる

山科からの石垣石伐り出しについて、あらたな文献になるのではないかとするのが、『大坂市立博物館研究紀要 四号』に上田穰著「三雲家文書について」があり、あらたなとするより既に1972年の発表であるから44年前に遡りますが、野田忠夫氏なども三雲文書を使って「伏見城下町の一考察(『京都教育大学研究紀要 A 昭和44年』)」を書いておられ、その中にある

「一三、美濃部隠岐守・水原吉一・伏屋為長・石尾治一連署状(高田・中つかさ宛)」、

以上
急度申候、宇治
方醍醐・山科山
刈取候事、被成停止候
付候て、すみ山之儀付
可相尋儀候間、早々
可被越候、為其申候
此使者をまち申候、
恐々謹言

三月十一日 石尾下野治一(花押)
伏屋左衛門佐為長(花押)
水原石見守吉一(花押)
美濃部隠岐守(花押)

高田
中つかさ
参る

＜参考＞として上田穰さんの解説があり、「この付近(おそらく、伏見山をも含めて)の柴の刈取を禁止する旨、深草村・伏見村の高田・中つかさ両家に伝えたものである。」これについて私、武内も柴刈り停止を想定したが、文書には刈取るとあるが、柴との表記は見えてこない。

むしろここでは石垣石の刈取り(伐り出し)停止、三月十一日を以て、伐り出しを終われとなるのであろう。その日付けなれば、一連の指月城造営との整合性が生まれる。

論稿者や利用者が「三雲家文書」を利用しても、当時は伏見城下町形成が中心で、石垣石伐り出しに関わる注目度がなかったか、論議に及ばなかったと思われる。したがって所謂再発見で見つめ直したに過ぎないが、「三雲家文書総目録」にある文禄三年か3,11、とした記録は貴重で同時性がある。但し、見つめ直した時点では石伐り出し作業前の柴刈を想定していたが、ここでは石伐り出し作業そのものを想定し、改めて訂正をする。

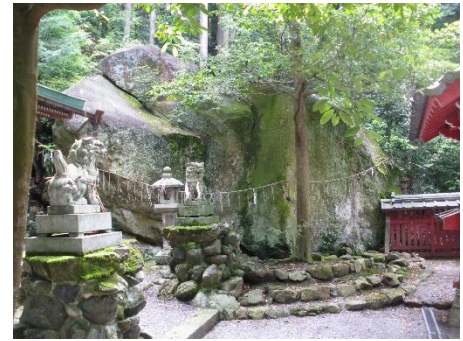
4、遺跡指定「461 山科大塚・小山石切丁場」

…指定範囲を示す第2図とご神体磐の2枚

白石神社のご神体石は10m×4mに及ぶ大巨岩であり、伐り出されようとしたかが焦点であるが、矢穴が打ち込まれ三条の矢穴痕筋があったが、現ご神体には二条の矢穴痕筋を示す。したがって北西角には矢穴痕列痕が見えて、一部は落されたであろうコッパ(木片)があるが、取り出されずに神殿前にあるのはかなりの大きさではないか。

作業工程の状況として奥田先生の報告を引用しますが、南北方向と東西方向の二列の矢穴痕列があり、

南北列は北が石の端に南が中央で止まっている。作業は一日で矢穴を3個か4個を開けるノルマがあって、次の日には矢を入れて割る段取りのようだったが、北西を除き残っている事実はひび割れが生じ諦めたか（思い通りに割れない）、採石を放棄する何かの状況によると思われる。こうした例が葭ヶ谷B地区（第41図）にもあって、伐り出す石の大きさが随分違いますが、同じく「一に〇」の刻印は共通していて、その刻印は毛利藩と云われ疑義を持つ方ありませんが、取りだし方でも共通しているのかと思います。「やましなを語りつぐ会」が製作している、紙芝居公演での主要なテーマを担う白石神社のご神体石ですが、こういう解釈をしておきます。



先ず取り出そうとする場合（採石）ですが、山の斜面に巖の露頭が見えていて、石の周囲を開けるために周りの土を除く（北、東は取り除いていない）、西側の神殿と、階段である南側には石の高さになる底が見えて落しやすい。つまり先に神殿があったとするより、採石作業があって割る段階で取残した為、西側空地に神殿、白石神社が建って、南側からの段差には階段が付けられたような配置になります（武内）。

5、「山科石」が伏見城以外にも

本年の京都橘大学新入生歓迎をこめて、3月31日石切場案内があり同行しました。終了後ですが、一緒に参加したOBである福家恭さんからお話があり、巖にペケ印のような刻印がありますがご存知ですかでした。それを知らなかっただけに、翌日は小山長尾町になる第二砂防ダムへ苔落しに行き、同時に拓本作業を行い確認しますと、ペケ(×)とするより縦線(一画)が長く(14cm位)、横線(二画)が短い(10,4cm)十字刻印が深く掘りこまれています。その他にも違う面ですが深掘りの一字と、続いて掘り進めようとしたのか〇らしい半円状があるようで、只今は皆様の意見が一致せず保留としていますが、矢穴痕も一ヶ所は伺えます。その石の底辺は広く頂部がすぼむような形ですが長さ一間(180cm)あり、石垣石の築石としては十分な大きさです。



調査概要報告書である『伏見城関連の石切場について』に載せる「…刻印石一覧」16刻印石に無い刻印となり、「一に〇」と、それに漢数字二が付くもの、「角立四つ目結」、二種の刻印が掘りこまれた并岩刻印の四種類に、この度の新たな「十字」刻印が加わります。

すかさず京都新聞で取り上げられ記事となっていますが、島津家家紋、キリシタン？との風評を得ていますが、この刻印は伏見城の石垣石に関わっては存在するようで、伏見廃城後の石垣石が淀城の石垣を構成しているのは事実で、その淀城周辺の発掘によって集められた刻印石が水垂収蔵庫に在り刻印の拓本を採らせて戴き、京都市埋蔵センターからの『長岡京・淀城（尾崎徳行氏他二人著）2006-23』には、

「表 8 石垣刻印一覧表」に刻印 11 として「十字刻印」の拓本を添えて載っている。さして不思議な刻印ではなさそうですが、当地では初めてでこれまでになかった刻印となります。

これと関連さすのですが、十字の下に一、二、三を入れた刻印（二条城にもある）が、知恩院黒門坂の石垣や周辺にあります。この作業は後でメンバーに加わった池部さんの調査ですが、知恩院は徳川期になり京の東の砦のような構えとなり、東山通りに面しても矢穴を開けた巨石がかなりあり、高台寺にかけても散在しています。高台寺は秀吉没後関ヶ原戦い以後に北政所の住处ともなりますが、家康はそれに手も貸しています。関ヶ原の戦い前に伏見城は焼けますが、一部残った名護屋丸や山里丸の施設、建物は（からかさ亭＝茶席）は徹底的に取り除き、徳川の施設を建てるようです。

七条辺の刻印や矢穴のある石材は、方広寺や大仏殿跡の破壊で、智積院や妙法院への石垣石の移動は考えられますが、四条辺はむしろ直接山科からの運びを想定しても良いのではと考えますが。



6、大塚石切場調査で溪筋を挟み、毛利藩と京極藩が採石に関わり棲み分けたか

大変な命題ですが何ら進展はありませんが、しかし毛利藩採石を疑う人はありません。片方の「角立四つ目結」なる藩印についての確な答えは出せていません。これも昨年 8 月ですが大文字送り火の翌日に池部氏が南禅寺山門石垣から、刻印を発見したとして写真が送られました。翌日調査をして後二つが出ましたが、同じメンバーの永井氏に連絡すると、古い手帳をめくりもう一つ在る筈だと調査に加わって戴き四つになりました。全て「釘抜」紋と云われる口の中に小型の口が入る入れ子状で、外側一辺 20cm～17cm で、内側一辺 6cm～7cm になり、これが大阪城にもある京極家紋とされています。

この「釘抜」紋と「角立四つ目結」紋の関連性はあるようで、四つ目結を 1 個ずつにばらして独立させ、中の口を○にノミ打ちにすれば成り得るが、いささかこじつけになるが。

この山門は臨済宗大本山南禅寺であるが、階上には本光国師（以心崇伝）、つまり徳川幕府の最高ブレーンを祀ると同時に、寛永 5（1628）年の藤堂高虎が率いる、大坂夏の陣で倒れた家来の菩提を弔う為に再建したとする。ここでも「山科石」はありますが、藤堂藩の石切場にある加茂石が多いように思います。以上のような経過がありましたが、京極藩とするのには何か不足している現状です。



7、『伏見城関連の石切場について』報告書発行と CD の製作

調査概要報告書であるが、山科石切場調査・研究グループとして



この四年間の報告を試みた。最初に CD 制作に踏み切ったが、やはり活字になる本の体裁が望まれて同じ内容になる本の発行に踏み切った。

その中心となっているのが、青地氏で成文を森岡先生と編集に携われここに呈示しております。

既に第二版 40 部を発行されていますが、初版 150 部の内 58 部を京都関係の公的な図書館、資料館に寄贈していますので、皆様の目に触れて戴く機会がありますので宜しくお願いします。

ついては、今後の展開ですが、京都橘大学での取組が進行し、科学的な調査発掘を含むプログラムがあるようで、我々一同もそれに期待し成果は公表されますので期待して下さい。